西谷墳墓群

1999年7月

出雲市教育委員会

写真提供：国立大学法人山口大学埋蔵文化財

西谷墳墓群の概要

西谷墳墓群は、弥生時代終わり頃から古墳時代にかけての大墳墓群です。墳丘墓の数は２７基にも及び、その他土壙墓・石棺墓５基も確認されています。中でも弥生時代の墳丘墓は全国的にも希有な巨大さを誇るもので、被葬者達の権力の大きさを知ることができます。

弥生時代後期には遺跡の西側・北側丘陵に「四隅突出型墳丘墓」と呼ばれる奇妙な形をした墓が築かれました。１～４、６、９号墓がそれにあたり、中には３号墓や９号墓のように突出部分を含めると５０ｍにもなる巨大なものもあり、当時の出雲地域の統率者達の墓域であったものと考えられます。古墳時代に入っても遺跡の東側の丘陵地を中心に古墳が築かれますが、その規模は急速に縮小していきました。

２号墓 ～埋もれていた巨大な墳丘～

かつては小形の四隅突出型墳丘墓と推定されていましたが、発掘調査によって巨大な墳丘（方形部３５ｍ×２４ｍ）が露わになりました。

３号墓 ～発掘された王墓の祀り～

主体部上に築かれた壮大な墓上施設が発掘されました。また、吉備の特殊土器や北陸系の土器が出土していることから、埋葬された「王」が他地域との広い交流を持っていたことも窺えます。

（写真提供:島根大学考古学研究室）

９号墓 ～最大の四隅突出型墳丘墓～

方形部４２ｍ×３５ｍの規模を誇る最大の四隅突出型墳丘墓です。当時の山陰地方における強大な権力の象徴とも言えるでしょう。

現在、墳頂部には阿蘇津彦命を祀る三谷神社が鎮座しています。（写真提供:島根大学考古学研究室）

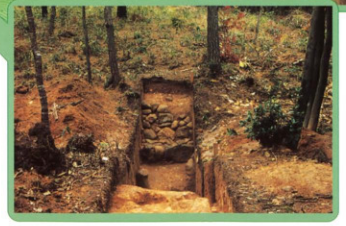
７号墓 ～四隅から古墳へ～

古墳時代前期の方墳もしくは前方後方墳です。弥生時代の四隅突出型墳丘墓のような壮大さは失われてしまいました。

16号墓 ～中小規模の群集墳～

古墳時代中期の直径１１ｍの円墳です。墳頂部には石棺が納められていました。

西谷墳墓群東側の丘陵には同様な中小古墳が数多く分布しています。



４号墓～西谷墳墓群の発見～

４号墓は西谷墳墓群発見の契機となった墳墓です。１９５３年、４号墓墳丘部開墾中に大量の土器が発見されたことによって、西谷丘陵一帯が遺跡であることが初めて確認されました。２号墓、３号墓に並ぶ大規模な四隅突出型墳丘墓です。

王墓の発掘
～西谷3号墓の調査～

西谷３号墓は、西谷墳墓群に６基ある「四隅突出型墳丘墓」と呼ばれる弥生時代後期（今から約１８００年前）の墳墓の１つで、西谷９号墓に続く規模を誇る、出雲最大級の弥生墳丘墓です。

この西谷３号墓では、島根大学考古学研究室を中心とした調査団によって発掘調査が行なわれています。調査は１９８３年から１０年間、延べ日数２１５日に及ぶものでした。

この調査によって、それまで謎に包まれていた西谷墳墓群の弥生王墓に初めて本格的な発掘調査のメスが入ることとなり、出雲の歴史を探る鍵となる数多くの貴重な成果が得られました。

西谷3号墓の調査風景（写真提供:島根大学考古学研究室）

墳丘の調査では、方形部の規模が東西４０ｍ、南北３０ｍ、高さ４ｍの、突出部を含めると長辺５０ｍにもなると考えられる巨大な墳丘が確認され、墳丘を飾る「貼石」の状況も明らかになっています。また、墳丘頂部に掘り込まれた埋葬の跡、「主体部」の調査では、葬送儀礼や地域間の交流についての様々な発見がされました。

それでは、これからこの主体部の調査の成果を中心に、少し詳しく紹介していきましょう。

西谷3号墓復元模型（写真提供:島根県教育委員会）

墓上の祭祀

第４主体と名付けられた３号墓の最も中心となる主体部では、大きな土壙の底に棺を置いて埋めた後、その上に４本の巨柱を用いた施設が建てられていたことが確認されました。柱に囲まれた棺直上にあたる場所では朱の付いた丸い石が御神体のように置かれており、丸石の周りには砂利が敷かれていたようです。その上からは約２００個体にものぼる大量の土器がかたまって出土しました。

当時の第４主体上では、亡き王を埋めた上に４本柱の施設を建て、その中央に置いた赤い丸石を敬いながら、多くの参列者達が飲み食いをしていたのでしょう。最後には使用した土器類を中央に集積したようです。これは王墓で行なわれる神聖な儀式の一風景であったと考えられます。

この儀式は、亡き王の霊を弔うとともに、王に宿ると考えられていた特別な力を新たな王が引き継ぐ意味もあったのではないかと考えられています。

第4主体供献土器出土状況（写真提供:島根大学考古学研究室）

約２００個体の土器が第４主体の上から出土しました。

第4主体墓上施設検出状況（写真提供:島根大学考古学研究室）

大量の土器の下から巨大な４つの柱穴が現れました。中央には丸石が置かれています。

第4主体墓上祭祀復元模型（写真提供:島根県教育委員会）

第４主体の調査の結果から、墓上で行なわれた当時の儀式の様子が復元されています。儀式には故人の一族のみでなく、配下の集団の代表者達、政治的係わりの深い地域の集団の代表者達など多くの人々が参加していたものと考えられます。

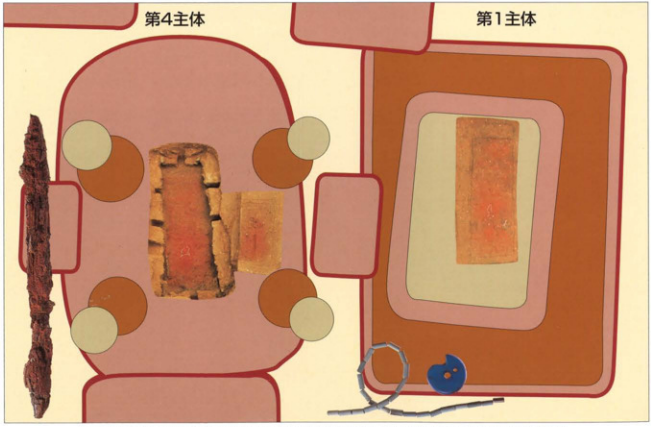
埋葬施設と副葬品

西谷３号墓の墳頂部平坦面では大小８つ以上の墓壙があることが確認されています。つまり、このお墓には少なくとも８人以上の人が葬られているということです。それらの墓壙の中でも、お墓のほぼ中央に並んで深く掘り込まれた、「第１主体」と「第４主体」と名付けられたものが３号墓の中心的な埋葬施設です。墓壙の上からは棺の真上にあたる場所で朱の塗られた丸石が第１主体で１つ、第４主体で２つ出土しており、その上から大量の土器が出土しました。

第１主体では、２段に掘り込まれた長方形の大きな墓穴の中に、２重構造になった棺が納められていました。墓壙の大きさは長辺約６ｍ、深さ約１ｍにもなります。棺の中には真っ赤な朱が敷きつめられていたようです。棺の中に納められた副葬品は、ガラス製の首飾り・勾玉など各種玉類が大量に出土しました。

第４主体では、楕円形の大きな墓壙の中に、小さな棺（副棺）と大きな棺（主棺）の２つが一緒に納められていました。大小どちらの棺も２重構造で中に朱が敷きつめられていました。墓壙上の丸石はそれぞれの棺の真上に置かれていたものです。墓壙の大きさは第１主体とほぼ同様ですが、深さは約１．５ｍで第１主体よりもさらに深いものでした。また、墓壙上に４本柱の施設を建てていたこともわかっており、他の主体部の被葬者とは隔絶した性格の人物が埋葬されていたものと考えられます。棺の中に納められた副葬品としては、鉄剣、ガラス製の首飾りが出土しました。

埋葬施設や副葬品の内容などから想像すると、第４主体には当時の「王」が、第１主体にはその「妃」が葬られていたのではないでしょうか。



第1主体・第4主体とその副葬品（写真提供:主体部-島根大学考古学研究室 副葬品-島根県教育委員会）

他地域との交流

第１主体・第４主体の墓上からは合計約３００個体もの土器が出土しましたが、これらの土器の中には地元の土器だけでなく他の地域に特徴的な土器も確認されています。割合としては地元の土器が全体の約３分の２で、残りの約３分の１が他地域の特徴を持つ土器でした。その代表的なものが、吉備地方の特殊土器と北陸系の土器です。西谷３号墓の王の葬送儀式には吉備・北陸方面の人々も参加していたのでしょう。

第4主体供献土器（写真提供:島根県教育委員会）

西谷３号墓の築かれた頃の吉備・北陸地方では、やはり巨大な墳丘墓が築かれていますが、これらの墳丘墓自体にも西谷３号墓との共通点が見られます。

吉備地方では、この時期に楯築墳丘墓などの大形墳墓で２重の棺、大量の朱の使用、大量の土器を使用する墓上の祭祀、剣・玉の副葬品など、西谷３号墓と非常によく似た埋葬が行なわれていました。また、北陸の福井県小羽山３０号墓などでは、四隅突出の形をした墳丘が確認されています。これらには貼石はないものの、墓壙上の朱の付着した石、墓上の土器祭祀、剣・玉の副葬品など、西谷３号墓の類似点が多く見られます。

これら出雲・吉備・北陸の３地域の首長が互いに交流を持っていたことは明らかです。西谷３号墓の被葬者はこうした広い交流を背景に強い力を保持していたのではないでしょうか。

写真提供：島根県教育委員会

出雲のシンボル「四隅突出型墳丘墓」

四隅突出型墳丘墓は、出雲地方を中心として山陰で多く造られた弥生時代の墳丘墓です。四角い墳丘の角が奇妙に張り出した形をし、周囲には石が張り付けてあります。

今からおよそ１９００年前に中国山地で発生したものです。約１８００年前までには山陰各地で築かれるようになり、この頃から四隅の墳丘には巨大なものが見られるようになりました。

宮山4号墓（写真提供:島根県教育委員会）
安来市荒島墳墓群の四隅突出型墳丘墓の一つ。
四角の四隅が張り出した形状が良くわかります。

特に西谷墳墓群と安来市の荒島墳墓群では巨大な四隅が集中して築かれています。どちらの墳墓群にも、全国的にも希な規模の弥生墳丘墓が含まれており、当時の出雲地方で最も力を持った人たちの墓域であったと考えて良いでしょう。

出雲で四隅突出型墳丘墓が出現した時代は、『魏志倭人伝』の記載によると、日本各地の「クニ」が覇権を争う戦乱の時代にあたるものと考えられます。こうした戦乱期の中、当時の出雲の権力者達は四隅突出型墳丘墓をシンボルとした広域の共同体を形成して他のクニに対抗していたのではないでしょうか。

四隅突出型墳丘墓の特徴

複数の埋葬（仲仙寺9号墓 写真提供:島根県教育委員会）

墳丘の頂上には複数の墓穴がある場合が多く見られ、中でも埋葬の中心となる権力者の墓穴は最も大きく、深く造られます。

墓上に置かれた石
（西谷3号墓 写真提供:島根大学考古学研究室）

埋めた墓穴の上から出土するものです。呪術的な顔料である水銀朱（すいぎんしゅ）が付着していることが多く、墓上で行なわれた葬送儀礼において、重要な意味を持つ石であったと考えられます。

墳丘を覆う石（安養寺3号墓 写真提供:島根県教育委員会）

四隅の張り出し（西谷3号墓 写真提供:島根大学考古学研究室）

墳丘の斜面と裾周りでは全面に石が貼られています。特に裾周りでは、石貼りの狭い平坦面の外周に列状に石を並べ立てるという、特徴的な手法が見られます。

四隅突出型墳丘墓の最大の特徴が四方向に張り出した墳丘の張り出しです。この張り出しは墓上へ登るための道として発達したものと考えられています。

西谷丘陵に築かれた四隅突出型墳丘墓

西谷墳墓群には、３号墓の他に５基の四隅突出型墳丘墓が発見されています。１号墓や６号墓のように、中には半壊していて全形のつかめないものもありますが、その大半は方形部長辺３０ｍを超える巨大なもので、全国的に見ても最大級の弥生墳墓です。

西谷の四隅突出型墳丘墓群は、弥生時代後期（約１８００年前）の出雲地方を象徴する遺跡とも言えるもので、出雲の歴史を解明する鍵となる遺跡の一つです。

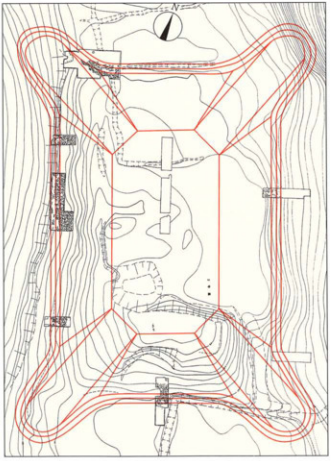
それでは、この類まれな弥生時代の墳墓群を、すでに紹介した３号墓以外のものについて、以下で少し詳しく紹介していきましょう。

２号墓

３号墓の北に隣接して立地しています。南北３５ｍ、東西２４ｍ、高さ３.５ｍの方形部に突出部が付く四隅突出型墳丘墓です。突出部を含めると長辺４０ｍを超える巨大な墳丘になります。裾周りには２重の石列が廻り、墳丘の斜面には貼石が施されていました。墳丘上部は大半が削平されており、中心となる埋葬施設等はうかがい知ることができませんが、墳頂部の南側縁辺部付近に墓壙２基が確認されています。出土している土器類には、出雲地方の土器のほかに吉備地方の特殊土器なども確認されています。

2号墓の墳丘
奥に見える高まりが地表から確認できる残丘、手前に見える石貼り部分が発掘調査によって現れた本来の墳丘の裾です。

2号墓の石列
墳丘の裾周りには、3号墓と同様、2列の石列が廻っており、各石列の内側は石を敷いた平坦面になっていました。



西谷2号墓墳丘推定復元図（S=1／400）

1号墓

2号墓の北に隣接しています。墳丘北辺と西辺が崩壊しており正確な規模の把握はできませんが、現状で北西ー南東約５ｍ以上、北東ー南西８ｍ以上、高さ１．７ｍの方形部に長さ１．５ｍの突出部が付く四隅突出型墳丘墓です。原形の規模も２０ｍに満たないものと推測されます。墳丘には貼石と１列の石列が施され、埋葬施設は墳頂部で４基の墓壙が確認されています。

西谷1号墓の墳丘

4号墓

3号墓南側約５０ｍの同一丘陵上に位置しています。南北２７ｍ、東西３４ｍ、高さ４ｍの方形部に突出部の付く四隅突出型墳丘墓です。突出部を含めると長辺４０ｍを超える規模になるものと考えられます。埋葬施設などは確認されていませんが、墳丘には貼石と１列の石列が施されていることが判明しています。遺物には吉備の特殊壺、特殊器台などが含まれています。

西谷4号墓の貼石・石列

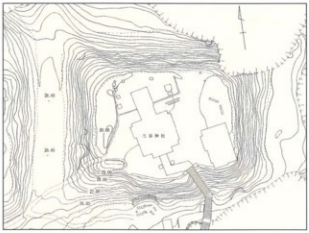
6号墓

4号墓の南約１５０ｍの同一丘陵上に位置しています。墳丘の西側と南側が崩壊しているため正確な規模は把握できませんが、東西１７ｍ前後、南北８ｍ以上、高さ２ｍを計る方形部に突出部の付く四隅突出型墳丘墓です。突出部を含めても２０ｍ程度の墳丘であったと推定されます。貼石と石列の痕跡が残っていました。埋葬施設は墳頂部の南側崩落面で4基の墓壙が確認されています。

西谷6号墓の墳丘

9号墓

1～6号墓が立地する丘陵の北東約２５０ｍ、斐伊川を望む独立丘陵に位置しています。東西４２ｍ、南北３５ｍ、高さ４．５ｍの方形部に突出部が付く最大の四隅突出型墳丘墓です。突出部を含めると５０ｍを超える規模になると推測されます。貼石・石列は存在するようですが、発掘調査が行なわれていないため、詳細はわかっていません。



西谷9号墓墳丘測量図（S=1／800島根大学考古学研究室作図）

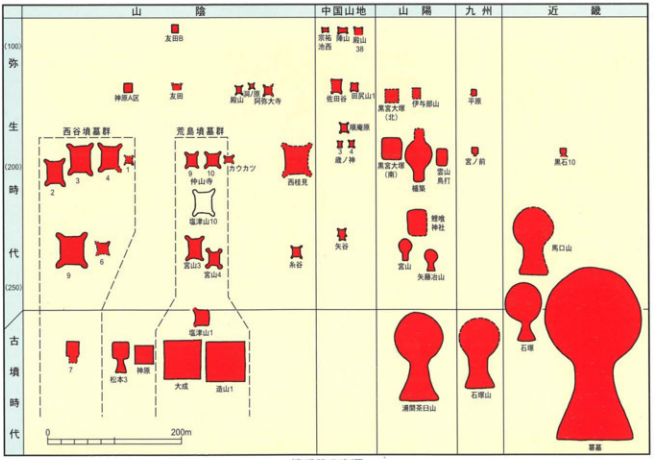
西谷墳墓群が語るもの
～弥生時代後期の出雲～

2世紀頃の日本は、中国の史書『魏志倭人伝』に「倭国乱」との記載があるように、クニとクニとの戦乱の時代であったようです。この時代の波は、当然当時の出雲の地にも少なからず影響を与えていたことでしょう。

この頃の出雲では、神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡に象徴される青銅器を祀る時代に幕を閉じ、出雲独特の墓、四隅突出型墳丘墓が発達していきました。また、西谷丘陵周辺の平野部では溝を配置した大規模な集落が急速に増加することも注目されます。こうした時期に相前後して、全国各地でもやはり墳丘墓が発達しています。

四隅が出雲独特の墓であるように、他の地域でも墳丘や埋葬形態に地域色が見られます。例えば、吉備地方では木や石で造った小さな部屋の中に木棺を納め、特殊壺・特殊器台といった葬儀用の巨大な土器が異常に発達します。また、近畿地方では円丘に突出部が付く、後の前方後円墳に同様な形状の巨大な墳丘が出現します。日本国内が争いに乱れる中、各地の権力者達はそれぞれの共同体のシンボルとなるような豪壮な墓を築き上げ、その結束を深めていったのでしょう。

出雲地方のシンボル、四隅突出型墳丘墓が最も発達したのは出雲平野を望む丘陵、西谷の地でした。3世紀頃までには西谷の「王」は吉備地方や北陸地方などとも交流を持ち、強い権力を誇っていました。ただし出雲地方東部、現在の安来市荒島の地にも比較的大形の四隅が連綿と築かれています。あるい



墳丘墓の変遷

は当時の出雲地方の勢力は西谷の「王」と荒島の「王」の２大権力同盟を軸としたものであったのかもしれません。

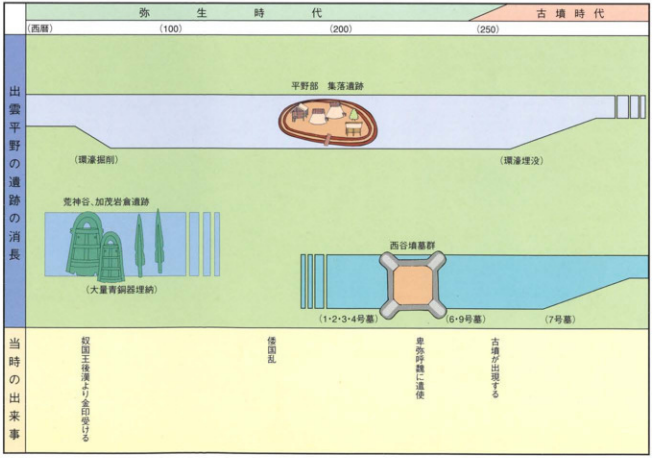
やがて近畿地方に拠点を置いた集団が各地の争いを平定したものとみられ、出雲もその支配下に組み込まれていきました。地方の時代の終わり、各地方が統一された「古墳時代」の始まりです。古墳時代になると、前方後円墳を頂点とする墓「古墳」の墳形・規模によって、権力を示す格付けが全国的に統一してなされるようになりました。古墳は、中央の王が地方の首長達に与えた政治的地位を示すものだったのです。

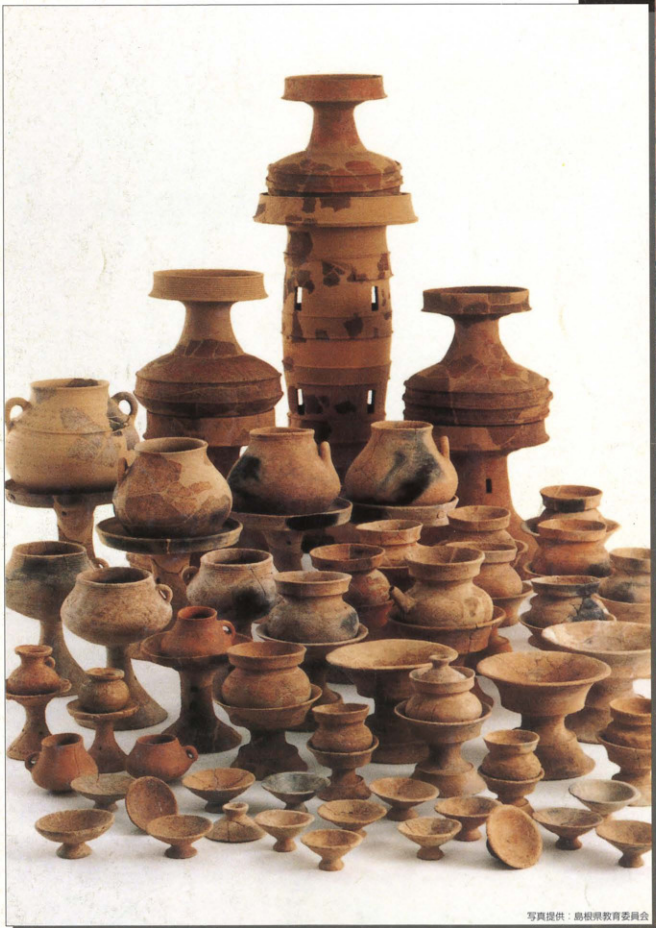
神庭荒神谷遺跡（写真提供:島根県教育委員会）

下古志遺跡　環濠

出雲地方でも四隅突出型墳丘墓は消失し、古墳が築かれるようになりますが、墳形・規模共にやや他地域に劣っているように見えます。特に西谷丘陵周辺では、大規模な古墳は見当たりません。また、古墳を造る集団の基盤となる出雲平野の平野部集落も古墳時代になるとその大部分が廃絶もしくは縮小してしまいました。西谷の「王」達が弥生時代に誇った権力は、時代の流れの中に埋もれていったのです。

西谷墳墓群は、出雲地方における弥生時代の繁栄から古墳時代の衰退という激動の時代を象徴するものであり、その時代の謎を解く鍵ともなる非常に貴重な遺跡であると言えるでしょう。





写真提供：島根県教育委員会

出雲市教育委員会 文化振興課